1987
作品ナンバー0273

藤本能道の色絵磁器 釉描加彩（ゆうびようかさい）

記録
35ミリ
カラー／33分
日・英語版

■企画
(財)ポーラ伝統文化振興財団
■監修
東京国立博物館資料部長　林屋晴三
東京国立近代美術館工芸課長　長谷部満彦
■協力
東京国立近代美術館
石川県立美術館
他

スタッフ
■製作
村山和雄
■脚本・演出
村山正実
■撮影
村山和雄
■照明
水村富雄
■編集
沼崎梅子
■音楽
長沢勝俊
■解説
幸田弘子

文部省特選　日本映画ペンクラブ推薦
1988年教育映画祭優秀作品賞　1987年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第６位

日本で色絵磁器が作られるようになったのは江戸時代で、有田で初代柿右衛門が始めたと伝えられている。今なお有田の古伊万里や、加賀の古九谷は声価が高い。しかし現代の色絵磁器は、作陶家の個性的な芸術表現をもって広く行なわれるようになった。藤本能道は、富本憲吉、加藤土師萌に師事して色絵の世界に入り、写生に立脚した絵画的な色絵の表現を研鑽、独自の芸風を模索しつつ今日に至っている。映画は、重要無形文化財保持者、藤本能道の生き方と、その創作過程を記録する。

色絵磁器の作家・藤本能道の技法が大きく変化し始めたのは、50代も終わりの頃で、色絵の伝統技法のひとつである「骨描（こつがき）」と呼ばれる輪郭を線描きする方法をやめて、線を描かずにぼかすように色絵付けする「没骨描法（もっこつびょうほう）」という技法を取り入れたことからだった。さらに「釉描加彩（ゆうびょうかさい）」と名付けた新しい色絵の技法を生み出したのは65歳を過ぎてからである。まず色のある釉薬（うわぐすり）で絵付けをして高温で本焼きし、上絵付けは、色絵具で再度絵を描き低温で焼き付けるという技法で、長い試行錯誤の末の色絵の集大成でもあった。

藤本は、四季折々の鳥や花を写生し、華麗な色絵磁器を創り出す。自然のものを写生し、自分が納得したものを模様化していくことを説いたのは師の富本憲吉で、その影響から脱け出そうと、一時は色絵磁器をはなれてオブジェ陶芸にも走った。だが再び色絵磁器に戻った藤本は、「釉描加彩」によって複雑微妙な色調、立体感、奥行きの表現などを可能にし、新しい色絵磁器の世界を作り出したのであった。しかし、彼は「私の今の仕事は、どこかへ行く過程である。これで完成したとは思っていない」と、その遍歴を語る。